張籍詩訳注（3）

――「寄遠曲」「行路難」――

畑村　学
橘　英範

The Translation and Annotation of the Verses Which Zhang Ji Wrote (3)

Manabu HATAMURA
Hidenori TACHIBANA

はじめに

本稿は、本誌第四五号に掲載された「張籍詩訳注」（一）および（二）（以下、前稿と称する）の続稿である。訳注については、本稿より押韻の項目を作ることとした。張籍詩の換韻が特徴的であるためである。

なお、前稿を発表してから、多くの方の御批正御教示を賜ったため、以下の点を本稿より改めることとした。

前稿において、陳延傑『張籍詩注』を参照できなかった旨を記したところ、赤井益久氏・丸山茂氏がそれぞれ御恵贈下さり、本稿より参照させていただくことができた（陳注と略称する）。お二人の御厚意に、心より感謝の意を表したい。

さらに、芳村弘道氏からは、久保天随『古詩評釈』（新声社、一九〇〇年）を御恵贈いただいた。張籍の作品では、「征婦怨」「節婦吟」「送遠曲」の三首が収められ、詳細な解説が施されている。早速本稿の「征婦怨」の訳注に活用させていただくことができた。深甚の謝意を表する次第である。

なお、張籍詩の引用に当たっては、本稿から巻数とともに作品番号を記すこととした。丸山茂氏の『張籍歌詩索引』（朋友書店、七六年）において附された作品番号である。これによって、読者諸賢がご参照いただく上でお役に立てれば幸甚である。

また、御批正いただいた点のいくつかについて、補足を行っておきたい。

丸山茂氏より、1「野居」の第3句「端坐」について、この場合、「端正」の「端」であり、正座の意であるとのご指摘をいただいた。「端坐」には、安座の意味と正座の意味があるが、ここでは氏のご指摘の通り、後者の意味であろう。張籍にもう一例用例があり、477「贈項斯」（巻八）に、「端坐吟詩妄忍飢、万人中覓似君稀」（端坐して詩を吟じ　妄りに飢えを忍ぶは、万人中に覓むるも　君に似たるもの稀なり）とある。ともに居住まいを正して詩作や読書に没頭する様子を言う。

許山秀樹氏より、2「西州」の第4句、「防塞兵」が一本「塞下兵」に作ることの御指摘をいただいた。担当者（橘）の見落としであり汗顔の至りである。許山氏に深く感謝申し上げるとともに、第4句の語釈に以下の文章を付け加えることとしたい。

畑村　学　宇部工業高等専門学校一般科講師
橘　英範　岡山大学文学部言語文科学科助教授

一九九九年九月二十四日受理

『全唐詩』の校語によれば、一本「塞下兵」に作る。この場合は音はサイ、とりでの意。

『史記』高祖本紀に「盧綰与数千騎居塞下候伺、幸上病愈自入謝」（盧綰　数千騎と塞下に居りて候伺し、幸に上の病愈ゆれば自ら入りて謝せんとす）という用例がある。詩においては、薛道衡の「出塞二首」其一（『文苑英華』巻一九七）に「塵沙塞下暗、風月隴頭寒」（塵沙　塞下暗く、風月　隴頭寒し）という用例がある。唐詩においては、陳子昂に「送別出塞」（『全唐詩』巻八三）に「胡兵屯塞下、漢騎属雲中」（胡兵　塞下に屯し、漢騎　雲中に属す）というなどの用例がある。

『楽府詩集』新楽府辞に「塞下曲」「塞下」の楽府題があり（巻九二～九三）、李白（六首）・王昌齢（二首）・李益（二首）・盧綸（六首）・皎然（二首）らの作品が収められている。張籍のものも一首収められているが、集は「塞上曲」に作る。

なお、杜甫には「塞下」の用例はなく、張籍には、417「塞上曲」（巻七）の詩題の異本と、その詩中に「将軍閲兵青塞下、鳴鼓鼕鼕促猟囲」（将軍兵を閲す　青塞の下、鳴鼓鼕鼕として　猟囲を促す）の形で用いているのみ。

3「雑怨」について、市川桃子氏からは、最後の二句「山川豈遥遠、行人自不返」が、帰る気のない夫を非難することばに解釈でき、こうした女性は、中唐以前の文人の作品には無かったものではないかというご指摘をいただいた。これについては、大きなテーマであるため、今後張籍の詩を読んでいく上で確認していきたいと思う。

伊藤直哉氏より、4「三原李氏園宴集」の第13・14句、「膏壌有餘滋、竹樹芳且鮮」の句が、宴席の食事についての表現ではないかという御指摘をいただいた。この点については、いまだ確証を得られず、現在調査中である。

以上のように、多くの方々より、御批正御教示を賜ったこと、誠に感謝に堪えない。引き続き、御指導御鞭撻を賜ることができれば幸甚である。

訳注

本篇には、5「寄遠曲」・6「行路難」（ともに巻一）の訳注を掲載する。

5 寄遠曲

【題解】

「遠くの人に寄せる」曲。『楽府詩集』巻九四「新楽府辞」に、王建の詩とともに採録される。王建「寄遠曲」との関係については、【補】を参照。

「寄遠」を詩題とする、或いは詩題に含む詩は、六朝には見られず、唐代に入り登場する。なかでも、張籍と同じく女性への恋情を詠じているのは、盛唐の李白「寄遠十二首」（王注本巻二五）中の数編の詩である。

大野実之助氏は『李太白詩歌全解』（早稲田大学出版部、八〇年）のなかで、「寄遠」中のいくつかの詩が、恋情を抱く女性に寄せた詩であると解釈している。また、『李白全集校注彙編集評』（詹鍈主編、百花文藝出版社、九六年）の「題解」にも、「十二首には、妻に寄せたもの、他の人（妻以外の女性）に寄せたもの、妻に成り代わって贈ったもの、他の人に成り代わって贈ったものがある。なかでも妻に寄せたもの、妻に成り代わって贈ったものが多い」（或寄内、或寄他人、或自代内贈、或代他人寄贈。但以寄内和自代内贈為多）と説明する。

特に、李詩の其十一には、自分のもとを去っていった「美人」に対する未練が詠われ、張籍の詩と共通する。よって、以下全文を挙げておく。

美人在時花滿堂　美人在る時　花　堂に満ち
美人去後餘空牀　美人去りて後　空牀を餘す
牀中繡被卷不寢　牀中の繡被　巻きて寝ねず
至今三載聞餘音　今に至るまで三載　餘音を聞く
香亦竟不滅　香も亦た竟に滅せず
人亦竟不來　人も亦た竟に来らず
相思黃葉盡　相思　黄葉尽き
白露隔青苔　白露　青苔を湿す

なお、陳延傑は、張籍「寄遠曲」に影響を与えた作品として、漢の張衡「四愁詩」（『文選』巻二九）を指摘する。「寄遠曲」への「四愁詩」の語句、措辞の影響については、【語釈】のなかで言及することにする。

【本文・書き下し文】

1 美人來去春江暖　美人　来去して　春江暖かし
2 江頭無人湘水滿　江頭に人無く　湘水満つ
3 浣沙石上水禽棲　浣沙の石上　水禽棲み
4 江南路長春日短　江南　路長くして　春日短し
5 蘭舟桂楫常渡江　蘭舟　桂楫　常に江を渡るも
6 無因重寄雙瓊璫　重ねて双瓊璫を寄するに因る無し

【押韻】
暖・滿・短—上声二四緩
江—上平四江　璫—下平十一唐
※江と璫は、『広韻』の押韻の規律からは外れるが、ここでは所謂通押で、押韻しているものと思われる。当時の実際の発音に基づいたものであろうか。中唐の古体詩に、『広韻』の規律から外れる押韻が見られることについては、小川環樹氏の『唐詩概説』第八章「唐詩の押韻および韻書」（「中国詩人選集」別巻、岩波書店、一五〇・一五一ページ）に説明がある。

【口語訳】
1 美しい人は去って　春を迎えた江は暖かくなった
2 江のほとりにその人はおらず　湘水が水をたたえるばかり
3 あの人が紗を洗った石の上には　今や水鳥が棲み
4 あの人のいる江南まで路は遠いのに　この春の良き日は短い
5 木蘭の舟に桂樹の楫　いつも江を渡っているのに
6 一対の耳玉を何度贈ろうにも　そのあてがない

【語釈】
1・2　美人来去春江暖、江頭無人湘水満
〔美人〕美しい女性。『楚辞』以来、会いたくても会えない、思慕の情を寄せる対象として詩文に記される。しばしば、不遇の臣下における君主を指してこのように言う。屈原の「離騒」に、「惟草木之零落兮、恐美人之遲暮」（草木の零落するを惟い、美人の遲暮ならんことを恐る）、同「九歌・少司命」に、「望美人兮未来、臨風怳兮浩歌」（美人を望むも未だ来らず、風に臨んで怳として浩いに歌う）とあり、また同「九章」には、「思美人」（美人を思う）の篇がある。

六朝・唐代の詩に頻出する。張籍自身にも多数用例があるが、それらはすべて表面上は女性を指している。この詩の「美人」も、3句に「浣沙」（薄絹を洗う）とあり、直接は女性を指している。

なお、この詩は、「美人」以外にも5句に「蘭舟桂楫」（後述）とあるなど、『楚辞』のことばを使用する。この詩の舞台が、次句に詠われるように、湘水下流域に設定されているためであろう。

〔来去〕去る。ここでは「去」にだけ意味がある。同様の「来去」の用例は、岑参「送厳黄門拝御史大夫再鎮蜀川兼覲省」（『校注』巻四）に、「蒼生望已久、来去不応遲」（蒼生　望むこと已に久しく、来去　応に遲るべからず）と見え、陳鉄民・侯忠義注に「来去、複詞偏義、実指去」と説明する。

張籍にもう一例。333「使行望悟真寺」（巻六）に、「無端来去騎官馬、寸歩教身不得遊」（無端　来去するに　官馬に騎り、寸歩も身をして遊ぶを得ざらしむ）とある。ただしこの場合は、文字通りの「来ることと去ること」でも解釈可能である。

なお、『楽府詩集』は「去来」に作るが、その場合でも「去」の字に意味がある。郭璞「遊仙詩七首」其七（『文選』巻二一）に、「長揖当塗人、去来山林客」（当塗の人に長揖し、去来して山林の客たらん）とあるのが同じ用法。

〔春江〕春を迎えた江。劉宋の顔延之「春駕幸京口侍遊蒜山作一首」（『文選』巻二二）に、「春江壮風濤、蘭野茂稊英」（春江は　風と濤とを壮んにし、蘭野は稊と英とを茂らす）とある。

唐詩に頻出し、例えば、孟浩然「送杜十四之江南」（『全唐詩』一六〇）に、「荊呉相接水為郷、君去春江正淼茫」（荊呉相接して　水郷を為し、君去りて　春江正に淼茫たり）とある。

張籍にもう一例。423「春江曲」（巻七）に、「春江無冰潮水平、蒲心出水鳧雛鳴」（春江冰無く　潮水平かに、蒲心水より出でて　鳧雛鳴く）とあり、暖かく穏やかな春の川の様子が詠われる。

1句、あなたは去ってもういないが、春は再び巡ってきた。春という良き季節にこそあなたにいてほしいのに、あなたは行ってしまった、の意。

なお、この詩には「江」の字が四回も使われている。

〔江頭〕川のほとり。唐代以降多く用いられはじめることば。3句「浣沙石」のあるところで、張籍以前で「浣沙（紗）」とともに用いられる例が、王維「洛陽女児行」（趙殿成箋注『王右丞集箋注』巻六）、「誰憐越女顔如玉、貧

賤江頭自浣紗」（誰か憐れまん　越女　顔　玉の如く、貧賤にして　江頭に自ら紗を浣うを）とある。王維の用例は、西施の故事を踏まえる。3句「浣沙」の語釈参照。

張籍にこの他六例。156「江頭」（巻二）と題する詩がある。

〔無人〕美人が去って行って、もういない。

〔湘水満〕春となって湘水の水かさが増す。湘水は、湖南省を流れ、瀟水と合流して洞庭湖に注ぐ川。『楚辞』の舞台として、多く「江湘」（長江と湘水）「湘沅」「沅湘」（沅水と湘水。沅水は、西南から洞庭湖に注ぐ川）の語で見える。「湘水」ということば自体は、『楚辞』系の作品では、東方朔「七諫・哀命」に、「測汨羅之湘水兮、知時固而不反」（汨羅の湘水を測り、時の固よりして反らざるを知る）と一例見えるのみ。

また、張衡「四愁詩四首」其二に、「我所思兮在桂林、欲往従之湘水深」（我が思う所は桂林に在り、往きて之に従わんと欲すれば　湘水深し）とあり、この詩と同様、「美人」との間を隔てるものとして、湘水が詠われている。

「湘水」の張籍の用例はこれのみ。

3・4　浣沙石上水禽棲、江南路長春日短

〔浣沙石上〕薄絹を洗濯する石の上。「沙」を、四庫本・『叩弾集』はともに「紗」に作り、意味としてはそちらが正しい。徐注には「案浣沙無意義、疑当作「浣紗」」と言うが、「浣沙」でも唐詩中に頻出し、両者はあまり意識せずに用いられていたようである。

戦国の越の美女・西施の故事に基づき、西施が紗を洗濯した石が「浣沙（紗）石」。なお、西施の故事については、松浦友久氏編『漢詩の事典』（大修館書店、九八年）「名詩のふるさと（詩跡）」の「若耶渓」の項目を参照。

固有名詞としての「浣沙石」は、現在の浙江省紹興市にあったものだが、ここでは「美人」に関わりのある場所として、一般名詞として使われている。

詩では、梁の元帝「烏棲曲四首」其一（『玉臺新詠』巻九）に、「復値西施新浣紗、共泛江干瞻月華」（復た値う　西施の新たに紗を浣うに、共に江の干に泛かんで　月華を瞻ん）とあり、庾信の「和趙王看妓詩」（『庾子山集注』巻四。以後、庾信の詩文の引用は同書に拠る）にも、「長思浣紗石、空想擣衣砧」（長に紗を浣う石を思い、空しく衣を擣つ砧を想う）とある。

唐詩に「浣沙（紗）」は頻出するが、「石」と結びつく例は、李白「送祝八之江東賦得浣紗石」（王注本巻一七）に、「西施越渓女、明艶光雲海。未入呉王宮殿時、浣紗古石今猶在。……若到天涯思故人、浣紗石上窺明月」（西施越渓の女、明艶　雲海に光く。未だ呉王の宮殿に入らざる時、浣紗の古石今猶お在り。……若し天涯に到り故人を思わば、浣紗石上　明月を窺え）とある。また李白には「浣紗石上女」（同巻二五）と題する詩もある。

李白の詩は、ともに西施の故事を直接踏まえ、古代の越の地名である「浣紗石」を言う。しかし張籍の詩では、2句に「江頭」「湘水」とあることから、西施が紗を洗った場所（古代の越の地）ではなく、西施の故事から導かれた美人の行為として「浣紗」の語が用いられている。

なお、『楽府詩集』巻八〇「近代曲辞」に、「浣沙女二首」が採録される。

「浣沙（紗）」の張籍の用例は、これのみ。

3句は、あなたが衣を洗っていた石のところには、あなたがいないために、今や水鳥が棲むようになった、という意味。

〔水禽棲〕水鳥が棲む。「棲」を、『楽府詩集』・『全唐詩』・四庫本がそれぞれ「栖」に作るのは別体で、音義ともに同じ。

曹植「洛神賦」（『文選』巻一九）に、「鯨鯢踊而夾轂、水禽翔而為衛」（鯨鯢踊りて轂を夾み、水禽翔りて衛を為す）とあり、詩では、西晋の成公綏の詩（『藝文類聚』巻二七）に、「素石何磷磷、水禽浮翩翩」（素石　何ぞ磷磷たる、水禽　浮かびて翩翩たり）とある。

唐詩にも頻出するが、「棲」と結びついたものに、王建「寄画松僧」（『全唐詩』三〇一）に、「最愛臨江両三樹、水禽棲処解無藤」（最も愛す　江に臨む両三樹の、水禽の棲処にして　解く藤無きを）とある。

張籍にもう一例用例があり、460「野寺後池寄友」（巻七）に、「繁木蔭夫渠、時有水禽鳴」（繁木　夫の渠を蔭い、時に水禽の鳴く有り）とある。

〔江南〕長江下流の南の地。ここでは次に「路長」とあることから、美人の去っていった所を言うが、具体的に何処を指すかはわからない。

ただ、この詩の舞台となっている湘水下流域も、「江南」に含めて言う場合があり、張籍の437「楚妃怨」（巻七）に、「湘雲初起江沈沈、君王遥在雲夢林。江南雨多旌戟暗、臺下朝朝春水深」（湘雲初めて起りて　江沈沈たり、君王　遥かに雲夢の林に在り。江南雨多くして　旌戟暗く、臺下朝朝　春水深し）とあるのは、そうした例のひとつ。

六朝・唐代を通じて詩文に頻見することばであるが、6句「璫」と一緒に用いられる例に、曹植「洛神賦」（『文選』巻一九）に、「悼良会之永絶兮、哀一逝而異郷。無微情以効愛兮、献江南之明璫」（良会の永く絶ゆるを悼み、一たび逝きて郷を異にするを哀しむ。微情の以て愛を効す無ければ、江南の

明璫を献ぜん）とある。

〔路長〕美人との距離の遠さを言う。曹植「贈白馬王彪」（『文選』巻二四）に、「汎舟越洪濤、怨彼東路長」（舟を汎べて洪濤を越え、彼の東路の長きを怨む）とある他、『文選』に二例見える。

張衡「四愁詩」では、遠くにいる「美人」に、張衡がさまざまな贈り物をしようとするが、其一「路遠莫致倚逍遥」（路遠くして致す莫く　倚りて逍遥す）、其二「路遠莫致倚惆悵」（路遠くして致す莫く　倚りて惆悵す）、其三「路遠莫致倚踟躕」（路遠くして致す莫く　倚りて踟躕す）、其四「路遠莫致倚増歎」（路遠くして致す莫く　倚りて歎きを増す）と、距離が遠いためにそれがかなわないと繰り返し詠われる。

〔春日短〕「美人」との良会に相応しい春の良き日は短い。

「春日」は、古く『毛詩』豳風「七月」に、「春日遅遅、采蘩祁祁」（春日遅遅たり、蘩を采ること祁祁たり）と見え、以後六朝・唐代を通じて詩に常見の語。

詩題に含まれるものも併せて、張籍にこの他六例。438「春日行」（巻七）には、「春日融融池上暖、竹芽出土蘭心短」（春日融融として　池上暖かく、竹芽　土より出でて　蘭心短し）とあり、春日の水辺の様子を詠じている。

なお「春日短」は、ここでは、「江南路長」と対比して用いられている。

5・6　蘭舟桂楫常渡江、無因重寄双瓊璫

〔蘭舟桂楫〕木蘭の舟と桂樹の楫。また「蘭」や「桂」は、舟の美称として付される場合がある。木蘭と桂樹が船に関連して用いられる例に、屈原の「九歌・湘君」に、「桂櫂兮蘭枻、斲冰兮積雪」（桂の櫂　蘭の枻、冰を斲り雪を積む）とある（「枻」を、『文選』は別体の「栧」に作る）とある。王逸の注に「櫂は楫なり」。

「蘭舟」は、木蘭の樹で作った舟のことで、「木蘭舟」を短縮した言い方。その由来について、梁の任昉『述異記』巻下（『漢魏叢書』所収）に次のような記事が載せられる。

木蘭川　在潯陽江中、多木蘭樹。昔呉王闔閭植木蘭於此、用構宮殿也。七里洲中、有魯班刻木蘭為舟。舟至今在洲中。詩家云木蘭舟、出於此。

木蘭の洲　潯陽の江中に在りて、木蘭の樹多し。昔　呉王闔閭　木蘭を此に植え、用て宮殿を構うるなり。七里の洲中に、魯班の木蘭を刻みて舟を為る有り。舟　今に至るまで洲中に在り。詩家の木蘭舟と云うは、此に出ず。

詩の用例としては、「木蘭船」の語が、梁の劉孝威「和採蓮詩」（『藝文類聚』巻八二）、「金鏘木蘭船、戯採江南蓮」（金鏘　木蘭の船、戯れに江南の蓮を採る）とあり、唐詩では、盛唐の韓翃「兗州送李明府使蘇州便赴告期」（『全唐詩』巻二四五）に、「楓樹林中経楚雨、木蘭舟上蹋江潮」（楓樹の林中　楚雨を経、木蘭の舟上　江潮を蹋む）とある。

張籍に「木蘭船」の用例が二例。379「春別曲」（巻六）に、「江頭橘樹君自種、那不長繫木蘭船」（江頭の橘樹　君自ら種う、那ぞ長じて木蘭の船を繫がざる）、435「春水曲」（巻七）に、「蕩漾木蘭船、中有双少年」（蕩漾たり木蘭の船、中に双少年有り）とある。

「桂楫」は、桂の木で作ったかい。「楫」を、『唐詩品彙』『叩弾集』は、別体の「檝」に作る。早く屈原の「九歌・湘君」に「桂櫂」と見える（先述）。

唐詩にも常見のことばであるが、「蘭」とともに見える例としては、屈原「九歌・湘君」を踏まえた徐堅の「櫂歌行」（『全唐詩』巻一〇七）に、「霜糸青桂檝、蘭枻紫霞舟」（霜糸　青桂の檝、蘭枻　紫霞の舟）とある。

張籍にもう一例。105「送鄭秀才帰寧」（巻二）に、「桂檝彩為衣、行当令節帰」（桂檝　彩もて衣を為し、行きて当に令節に帰るべし）とある。

〔常渡江〕いつも江を渡る。舟は江を行き交うのに、と次に続く。

〔無因〕当てがない。方法がない。屈原の「遠遊」に、「悲時俗之迫阨兮、願軽挙而遠遊。質菲薄而無因兮、焉託乗而上浮」（時俗の迫阨を悲しみ、軽挙して遠遊せんことを願うも、質菲薄にして因る無く、焉くにか託乗して上浮せん）とある。謝恵連「雪賦」（『文選』巻一三）にも、「怨年歳之易暮、傷後会之無因」（年歳の暮れ易きを怨み、後会の因無きを傷む）とあり、また、李白の「寄遠十二首」其六にも、「流波向海去、欲見終無因。遥将一点涙、遠寄如花人」（流波　海に向かって去り、見んと欲するも終に因る無し。遥かに一点の涙を将て、遠く寄す　花の如き人に）とある。

〔重寄〕何度も送ろうとする。「寄」は詩題「寄遠曲」の「寄」。

張籍自身にもう一例。232「送令狐尚書赴東都留守」（巻四）に、「朝廷重寄在関東、共説従来選上公」（朝廷　重ねて寄せて　関東に在り、共に説ぶ従来　上公を選ぶを）とある。

なお、6句に類似した表現が、梁の呉均「採蓮」（『玉臺新詠』巻六）に、「遼西三千里、欲寄無因縁」（遼西　三千里、寄せんと欲するも因縁無し）とある。

〔双瓊璫〕一対のイヤリング。「璫」は、『釈名』釈首飾に、「穿耳施珠曰璫」（耳を穿ちて珠を施すを璫と曰う）とあり、耳飾りのこと。女性の装飾品であり、詩の用例には、「古詩為焦仲卿妻作」（『玉臺新詠』巻一）に、「腰若流紈素、耳著明月璫」（腰は流るる紈素の若く、耳には明月の璫を著く）、また晋の傅玄「有女篇艶歌行」（『玉臺新詠』巻二）に、「頭安金歩揺、耳繫明月璫」（頭には金歩揺を安んじ、耳には明月璫を繫く）とあり、賦にも、後漢の劉楨「魯都賦」（『藝文類聚』巻六一）に、「挿曜日之珍笄、珥明月之珠璫」（曜日の珍笄を挿し、明月の珠璫を珥す）と見える。

耳飾りが、男性からの女性への心を込めたプレゼントであることは、後漢の繁欽「定情詩」（『玉臺新詠』巻一）に、「何以致区区、耳中双明珠」（何を以て区区を致さん、耳中の双明珠）と見える。これを踏まえた張籍の20「節婦吟」（巻一）にも、

君知妾有夫　君は妾に夫有るを知りて
贈妾雙明珠　妾に双明珠を贈れり
感君纏綿意　君が纏綿の意に感じて
繫在紅羅襦　繫ぎて紅羅の襦に在り
……　……

と詠われている。

「瓊」は美玉の名であり、張衡「四愁詩」其二に、「美人贈我金錯刀、何以報之英瓊瑤」（美人　我に金錯刀を贈れり、何を以てか之に報いん　英瓊瑤）と、「美人」に贈るプレゼントして見える。

耳飾りを贈り物とする場合、それを一対とすることは当たり前といえば当たり前だが、これに限らず、中国では古来、贈り物がしばしば「双」であることについては、川合康三氏が、『文選』（「鑑賞・中国の古典」一二、角川書店、八八年）の「飲馬長城窟行」に見える「双鯉魚」の解説で述べておられる。

【補】

この詩は、詠われる情景や語句など『楚辞』やその影響を受けた張衡の「四愁詩」を意識しつつ、さらに、女性に対する恋情を詠じた李白「寄遠」を踏まえて詠われたものと考えられる。

【題解】で触れたように、『楽府詩集』に採録される「寄遠曲」は、張籍の他、王建の作が一首あるのみである。以下に王建の詩を引用するが、張籍の詩と比較した場合、いくつかの共通点が指摘できる。

1美人別來無處所　美人　別れてより来（このかた）　処る所無し
2巫山月明湘江雨　巫山の月明　湘江の雨
3千回相見不分明　千回相見（あ）わんとするも　分明ならず
4井底看星夢中語　井底に星を看て　夢中に語る
5兩心相對尚難知　両心　相対してすら尚お知り難し
6何況萬里不相疑　何ぞ況んや万里にして相疑わざらんや

（『全唐詩』巻二九八に拠る）

両篇の共通点は、詩型が七言六句の古体詩であること、遠くにいる「美人」への恋情を詠じていること、1句が「美人」から読み起こされていること、詩の舞台が湘水下流域・長江中流域の古代・楚の地域に設定されていること（王詩「巫山」「湘江」）、5句で仄韻から平韻に換韻していること（王詩「所・語」―上声八語、「雨」―上声九麌［独用］／「知」―上平声五支、「疑」―上平声七之［同用］）などが指摘できる。

張王の楽府に唱和的傾向が見られることについては、朱炯遠氏が「論張王楽府中的唱和現象」（『上海大学学報』社会科学版、一九九七年五期）で論じており、この「寄遠曲」も、上述の理由などから両者の唱和の作であるとしている。

「美人」は、屈原の「離騒」に注した王逸が、「靈脩・美人は、以て君に媲（なら）ぶ」と言うように、『楚辞』以来、君主や君子の比喩として用いられている。張衡も「四愁詩」序のなかで、「屈原に依り、美人を以て君子と為す」と、詩中の美人が屈原に倣ったものであると説明している。このことと、張王の「寄遠曲」が唱和の作であることを考え併せれば、思慕の対象である「美人」は、それぞれ張詩では王建、王詩では張籍を指すのではなかろうか。張籍と王建は早くから交友があり、この詩は両者が離ればなれにある時期の作ということになろうか。

なお、両者の交友については、李一飛氏に「張籍王建交游考述」（『文学遺産』、一九九三年二期）、遅乃鵬氏に「王建交游考」及び、李論文を再検討した「張籍王建交游考述」商榷」（ともに『王建研究叢考』、巴蜀書社、一九九七年）の専論がある。

【注】

①静嘉堂宋本も「寄遠」其十一。ただし、テキストによっては、其十一を「長相思」に作るものがある。

（畑村）

6 行路難

【題解】

「行路難」は楽府題。『楽府詩集』雑曲歌辞に鮑照（十九首）以下、斉の宝月（一首）・梁の呉均（四首）・費昶（二首）・王筠（一首）・唐の盧照隣（一首）・張紘（一首）・賀蘭進明（五首）・崔顥（一首）・李白（三首）・顧況（三首）・李頎（一首）・高適（二首）・張籍（一首）・韋応物（一首）・柳宗元（三首）・鮑溶（一首）・貫休（五首）・斉己（二首）・翁綬（一首）・薛能（一首）を収め、さらに駱賓王の「従軍中行路難」二首・王昌齢の「変行路難」一首を収める（同書巻七〇～七一）。

『楽府詩集』の引く『楽府解題』に「行路難、備言世路艱難及離別悲傷之意。多以君不見為首」（行路難は、備さに世路の艱難及び離別悲傷の意を言う。多く「君見ずや」を以て首と為す）という。また、「按、陳武別伝曰、武常牧羊、諸家牧豎有知歌謡者、武遂学行路難。則所起亦遠矣。唐王昌齢又有変行路難」（按ずるに、陳武別伝に曰く、武　常に牧羊するに、諸家の牧豎に歌謡を知る者有り、武　遂に行路難を学ぶ、と。則ち起こる所亦た遠し。唐の王昌齢に又た変行路難有り）という。

これによれば、三国呉の時代にはこの曲が歌われていたようであるが、『楽府詩集』に収める最も古い作品は鮑照のもので、古辞は残っていないようである。「行路難」が多く「君不見」の表現を詩の冒頭に置くことについては、第5句の語釈参照。

前代の作品のうち、鮑照の「行路難」については、その代表作であるだけに、多くの論究がある。最近のものでは、佐藤大志氏「鮑照『擬行路難』の制作意図」（『漢文教室』第一七号、九三年）や井口博文氏「鮑照《擬行路難》の篇数について」（『中国詩文論叢』第一六集、九七年）がある。李白のものについては、吹野安氏に「李白『行路難』三首考」（『国学院雑誌』八五—一二、八五年）の専論がある。

なお、張籍は32「羈旅行」（巻一）において、楽府題としてではなく、「行路難」のことばを用いている。「遠客出門行路難、停車斂策在門端」（遠客門を出づれば　行路難し、車を停め　策を斂め　門端に在り）。

【本文・書き下し文】

1 湘東行人長嘆息　　湘東の行人　長く嘆息す
2 十年離家歸未得　　十年　家を離れ　帰ること未だ得ず
3 弊裘羸馬苦難行　　弊裘　羸馬　難行に苦しみ
4 僮僕飢寒少筋力　　僮僕　飢寒し　筋力少なし
5 君不見牀頭黄金盡　　君見ずや　牀頭　黄金尽き
6 壯士無顔色　　壮士　顔色無きを
7 龍蟠泥中未有雲　　竜は泥中に蟠りて　未だ雲有らず
8 不能生彼升天翼　　彼の升天の翼を生ずる能わず

【口語訳】

1 湘東の旅人は　長いため息をつく
2 十年家を離れて　まだ帰れない
3 ぼろをまとい　やせ馬にまたがり　行き悩む
4 しもべまで飢え凍え　力も出ない
5 ご覧なさい　枕元の黄金はなくなって
6 大の男が　顔色を失っているのを
7 竜は泥の中でとぐろをまいたまま　雲はできていない
8 天まで昇る翼が　生えてくれないのだ

【押韻】

息・力・色・翼—入声二四職　得—入声二五徳（同用）

【語釈】

1・2　湘東行人長嘆息、十年離家帰未得

〔湘東〕郡名。現在の湖南省衡陽市。劉宋に湘東王劉彧がおり、また梁の元帝蕭繹もはじめ湘東王であった。唐においては衡州の地。呂温の左遷地である。

詩においては、西曲「三洲歌」三首其三（『楽府詩集』巻四八）に「湘東酃醁酒、広州竜頭鐺」（湘東　酃醁の酒、広州　竜頭の鐺）という用例がある。これは銘酒の産地として用いられた例である。

唐詩においては、張説の「贈趙公」（『全唐詩』巻八六）に「湘東股肱守、心与帝郷期」（湘東　股肱の守、心は帝郷と期す）や、李嘉祐の「送張観帰袁州」（『全唐詩』巻二〇六）に「羨爾湘東去、煙花尚可親」（羨む　爾が湘東に去るを、煙花　尚お親しむべし）などの用例がある。これらは広く湘水の付近の意味で用いられているようである。

「湘水」は5「寄遠曲」第2句に見えた。

直接「湘東」の語を扱ったものではないが、このあたりの詩的なイメージについては、山内春夫氏に「『湘南（瀟湘）』考―文学作品と宋迪の八景図―」（『大谷女子大国文』第二二号、九二年。また『風花―中国古典詩論抄』彙文堂書店、九二年）がある。氏は、唐詩における湘水一帯の地の描かれ方を、次の五つに分類している。

①古伝説の地、湘水の神のいる地として
②官吏の左遷されることの多い地として
③山水の美しい地として
④候雁の渡来地として
⑤雨のよく降る風土として

この詩においては、②の左遷された官吏をイメージするのがふさわしいであろう。

また、松尾幸忠氏に「瀟湘考」（『中国詩文論叢』第一四集、九五年）があり、松浦友久氏編『漢詩の事典』（前出）の「名詩のふるさと（詩跡）」の章にも「瀟湘」の項目がある（植木久行氏執筆）。

張籍の用例はこれのみ。

〔行人〕旅人。『周易』无妄の六三の爻辞に「无妄之災。或繫之牛。行人之得、邑人之災」（无妄の災いあり。或いは之が牛を繫ぐ。行人の得るは、邑人の災い）といい、『毛詩』斉風「載驅」に「汶水湯湯、行人彭彭」（汶水　湯湯たり、行人　彭彭たり）というなど、古くから用いられることば。詩においても、「古詩為焦仲卿妻作」（『玉臺新詠』巻一）に「行人駐足聴、寡婦起彷徨」（行人　足を駐めて聴き、寡婦　起ちて彷徨す）というなど、古くから多くの用例がある。

3「雑怨」10句にも見え、その語釈に触れたように、張籍に他に二二例の用例がある。湘水と同時に用いた例として、420「湘江曲」（巻七）に「湘江無潮秋水闊、湘中月落行人発」（湘江　潮無く　秋水闊く、湘中　月落ち行人発す）の句がある。

〔長嘆息〕長くため息をつく。詩にしばしばみられる表現である。古い例としては曹植「棄婦詩」（『玉臺新詠』巻二）に「拊心長歎息、無子当帰寧」（心を拊ちて　長歎息す、子無くば　当に帰寧すべし）といい、阮瑀の「詩」（『藝文類聚』巻二七）にも「還坐長歎息、憂憂安可忘」（坐に還りて　長歎息す、憂憂として　安んぞ忘るべけんや）という。前者は女性の例だが、後者は『藝文類聚』で「行旅」の部に収めるように、この詩と同じく旅人の嘆きを表現した例。

張籍の用例はこれのみ。

〔十年離家帰未得〕「離家」の表現は、宋玉の「九辯」に「去郷離家兮徠遠客、超逍遥兮乗雲薄」（郷を去り家を離れて　徠りて遠く客たり、超かに逍遥して　雲に乗くにか薄まる）とあり、聞人倩の「春日」（『玉臺新詠』巻八）に「相与咸知節、歎子独離家」（相与にするは　咸節を知る、子の独り家を離るるを歎く）とある。

この二句、湘東の旅人が十年家を離れ、まだ家に帰れないことをいう。

「湘東行人」という人物が誰か特定の人物を指すのか、先に述べたように、単に左遷された官吏をイメージすべきなのか、よく分からない。当時は「湘東行人」というだけで、読者のイメージを惹き起こすものがあったのであろうか。屈原あるいは賈誼を意識した表現かもしれない。

張籍自身の経歴に照らし合わせると、羅氏の年譜によれば、大暦元年（766）和州に生まれて以来「湘東」に十年客となったという事実はないようである。若い頃の履歴はよく分からないので、あるいはその事実があったのかもしれないが、少なくとも伝記資料には記されていないようである。

ただ、元和元年（806）長安に出てから、張籍は十年間を太常寺太守として過ごした。その間、元和六年（811）には目を病み、韓愈に代筆してもらって李遜に抜擢を願い出ており、九年（814）には白居易が「読張籍古楽府」（二）の詩を作って張籍を推挙している。元和十年（815）の白居易の「重到城七絶句」其三「張十八」（八一八）にも「独有詠詩張太祝、十年不改旧官銜」（独り詩を詠ずる張太祝有り、十年　旧官銜を改めず）の句が見えており、当時の張籍が不遇感を抱いていたことが分かる。

十年を実数と考え、張籍に引きつけて考えれば、この詩の「行人」は、あるいは太常寺太祝時代の張籍が、自分自身の不遇を旅人の漂泊の愁いになぞらえたものかもしれない。

3・4　弊裘羸馬苦難行、僮僕飢寒少筋力

〔弊裘〕破れたかわごろも。また「敝裘」に作る。『呂氏春秋』審応覧「具備」に「三年、巫馬旗短褐衣弊裘、而観化於亶父」（三年にして、巫馬旗短褐にして弊裘を衣て、化を亶父に観る）という用例がある。

詩においては、岑参の「送二十二兄北遊尋羅中」（『校注』巻五）に「夜雪入穿履、朝霜凝敝裘」（夜雪　穿履に入り、朝霜　敝裘に凝る）といい、杜

甫の「晦日尋崔戢李封」（『詳註』巻四）に「朝光入甕牖、尸寝驚敝裘」（朝光　甕牖に入り、尸寝　敝裘に驚く）という。

張籍の用例は、この一例のみ。

〔羸馬〕やせ馬。詩においては「西門行」古辞（『楽府詩集』巻三七）に「遊行去去如雲除、弊車羸馬為自儲」（遊行して去り去らば　雲の除かるるが如し、弊車羸馬　為に自ら儲く）という用例がある。「弊裘」とともに詩に用いた例としては、韋応物の「温泉行」（『全唐詩』巻一九四）に「弊裘羸馬凍欲死、頼遇主人杯酒多」（弊裘羸馬　凍えて死せんと欲するは、主人の杯酒多きに遇うに頼る）の句がある。

張籍に他に二例ある。そのうち461「寄別者」（巻七）では、「羸馬時倚轅、行行未遑食。下車勧童僕、相顧莫歎息」（羸馬　時に轅に倚り、行き行きて未だ食うに遑あらず。車を下りて　童僕に勧む、相い顧みて　歎息する莫かれ）といい、この詩とよく似た表現を用いている。

〔苦難行〕「難行」は楽府題の「行路難」と響き合う表現。

ごく普通の表現のように思われるが、詩における古い用例をあまり見ない。張九齢の「奉和聖製送尚書燕国公赴朔方」（『全唐詩』巻四九）に「歌鍾旋可望、衽席豈難行」（歌鍾　旋いで望むべし、衽席　豈に行き難からん）とあるのが最も早い例か。

続く例は、杜甫の「偪側行贈畢四曜」（『詳註』巻六）に「自従官馬送還官、行路難行渋如棘」（官馬を官に送還してより、行路　行き難く　渋なること棘の如し）という例のようである。これは友人を訪問する手だてがないことを、楽府題「行路難」を「おどけて使った」（吉川幸次郎氏『杜甫詩注』第五冊、筑摩書房、八三年）例である。

「行」の文字、唐百名家本では「前」字に作る。

〔僮僕〕召使い。『史記』万石君伝に「子孫勝冠者在側、雖燕居必冠、申申如也。僮僕訢訢如也」（子孫の冠に勝うる者側に在れば、燕居と雖も必ず冠し、申申如たるなり。僮僕は訢訢如たるなり）といい、陶淵明の「帰去来兮辞」（四部叢刊本巻五）に「僮僕歓迎、稚子候門」（僮僕は歓び迎え、稚子は門に候つ）というなど、古くから多くの用例がある。

詩における用例としては、王維の「宿鄭州」（趙本巻四）に「他郷絶儔侶、孤客親僮僕」（他郷　儔侶絶え、孤客　僮僕に親しむ）という例があり、杜甫にも、「醉為馬墜諸公携酒相看」（『詳註』巻一八）に「朋知来問腆我顔、杖藜強起依僮僕」（朋知来り問えば　我が顔を腆くし、藜を杖き強いて起き僮僕に依る）というなどの例がある。

張籍の用例は、この詩と先に引いた461「寄別者」を除いて他に五例ある。その中で206「贈賈島」（巻四）に「籬落荒涼僮僕飢、楽遊原上住多時」（籬落荒涼として　僮僕飢う、楽遊原上　住むこと多時）という例は、召使いが飢えることによって貧困を表現したもので、この詩に近い用い方といえる。

〔飢寒〕飢えと寒さ。これも『春秋』襄公二十八年の左伝に「君子有遠慮、小人従邇、飢寒之不恤、誰遑恤其後」（君子は遠き慮り有り、小人は邇きに従う、飢寒すら之れ恤えず、誰か其の後を恤うるに遑あらん）というなど、古くから多くの用例がある。詩においてもしばしば用いられ、阮瑀の「駕出北郭門行」（『楽府詩集』巻六一）に「飢寒無衣食、挙動鞭捶施」（飢寒　衣食無く、挙動　鞭捶施す）という例などがある。

六朝詩においては、陶淵明が四例の用例を残しており、他の詩人を圧倒している。唐詩においては、杜甫以前には用例がほとんど見られないが、杜甫に至って際立って多くの用例を残していて、十二例を数える。

張籍の「飢寒」の例はこの一例のみだが、飢えと寒さを同時に用いた例としては、442「離婦」（巻七）に「辛勤積黄金、済君寒与饑」（辛勤して　黄金を積み、君の寒さと饑えとを済う）という例がある。

『唐文粋』、「飢寒」を「尽飢」に作る。

〔少筋力〕「筋力」も『礼記』『荘子』以来、よく見られることば。詩における用例としては、曹植「聖皇篇」（『宋書』楽志四）に「思一效筋力、糜軀以報国」（思いは一にして　筋力を效し、糜軀　以て国に報ず）といい、沈慶之の詩（『宋書』本伝所引）に「朽老筋力尽、徒歩還南崗」（朽老して　筋力尽き、徒らに歩んで　南崗に還る）という。

唐詩においては、これも初盛唐の用例はあまりないようだが、杜甫に至って十一例と多くなる。張籍には他に二例、244「寄王六侍御」（巻四）の例は、「漸覚近来筋力少、難堪今日在風塵」（漸く覚ゆ　近来　筋力の少なきを、堪え難し　今日　風塵に在るに）と、「少」の文字とともに用いている。

5・6　君不見牀頭黄金尽、壮士無顔色

〔君不見〕ご覧なさい。不特定多数の聴衆あるいは読者に対する呼びかけのことば。

この表現の変遷については、松枝茂夫氏の「ふたたび岑参の『胡笳歌』について—附『君不見』『君不聞』考」（東京都立大学『人文学報』三六、六三

年）および松原朗氏の「『君不見』考―鮑照から岑参までを中心として―」（『早稲田大学高等学院研究年誌』二七、八三年）に詳しい。

両著によれば、この表現は、六朝以来「行路難」に特徴的な表現であったが、唐になると他の楽府作品や詩にも見えるようになるという。そして、本来は不特定多数の読者を対象としていたが、岑参の頃から、ある特定の人物への呼びかけに用いられるようになるとされる。また、先に挙げた『楽府詩集』に、詩の冒頭に用いるということを指摘していたが、この張籍のものが中間におくように、岑参以降、中間におくようになるということである。

張籍のこの例は、特定の人物への呼びかける用法ではなく、六朝以来の、不特定多数の聴衆または読者に呼びかける用法にといえよう。張籍の「君不見」の用例はこれのみ。

〔牀頭〕ベッドのそば。古い用例は見あたらず、詩においては鮑照の「行路難」其五に「且願得志数相就、牀頭恒有酤酒銭」（且つ願う　志を得て　数しば相就り、牀頭　恒に酤酒の銭有らんことを）といい、其十九に「但願樽中九醞満、莫惜牀頭百個銭」（但だ願う　樽中に九醞の満つるを、惜しむ莫れ　牀頭百個の銭）という。ともに酒を飲むための金の置き場所として用いられている。

唐に入って、岑参にも「送孟孺卿落第帰済陽」（『校注』巻五）に「客舎少郷信、牀頭無酒銭」（客舎　郷信少なく、牀頭　酒銭無し）の句があり、「郡斎南池招楊鱗」（『校注』巻三）に「閑時耐相訪、正有牀頭銭」（閑時　相訪うに耐えたり、正に牀頭の銭有り）の句がある。

張籍の用例はこれのみ。

〔黄金尽〕「黄金」もよく見られることば。『周易』以来、詩文にわたって多数の用例がある。詩においては、阮籍の「詠懐詩十七首」其八（『文選』巻二三）に「黄金百溢尽、資用常苦多」（黄金　百溢尽き、資用　常に多きを苦しむ）と、「尽」の文字とともに用いている。王維の「送丘為落第帰江東」（趙本巻八）に「為客黄金尽、還家白髪新」（客と為りて　黄金尽き、家に還りて　白髪新たなり）とあり、李白の「送趙判官赴黔府中丞叔幕」（王琦注本巻一八）にも「廓落青雲心、結交黄金尽」（廓落たり　青雲の心、結交黄金尽く）とあって、ともに「尽」の字を伴って用いられている。

張籍の用例は他に四例。金の意味ではなく、お金の意味で用いられた例はもう一例、先に引いた442「離婦」の例。

〔壮士〕りっぱな男子。これも古く荊軻の「易水歌」（『戦国策』燕策）に「風蕭蕭兮易水寒、壮士一去兮不復還」（風は蕭蕭として易水寒く、壮士一たび去って復た還らず）という有名な用例があるほか、詩文にわたって多数の用例がある。

詩においては、曹植の「白馬篇」（『文選』巻二七）に「名編壮士籍、不得中顧私」（名　壮士の籍に編せらるれば、中に私を顧みるを得ず）」といい、李白の「蜀道難」（王注本巻三）に「地崩山摧壮士死、然後天梯石桟相鉤連」（地崩れ山摧けて壮士死す、然る後　天梯　石桟　相鉤連す）という。杜甫には十七例、そのうち「移居公安敬贈衛大郎」（『詳註』巻二二）に「自古幽人泣、流年壮士悲」（古より幽人泣く、流年　壮士悲しむ）の例は、自らを「壮士」とし、それが悲しんでいると表現した例。

張籍の用例はこの一例のみ。

〔無顔色〕顔色を失う。「顔色」も、『礼記』以来、よく見られる語。

詩における用例としては、『西河旧事』に記す漢代の匈奴の歌（『太平寰宇記』巻一五二等所引）に「失我焉支山、使我婦女無顔色」（我が焉支山を失えば、我が婦女をして顔色無からしむ）と「無」の文字を伴った用例がある。また、文人の用例としては、曹植「飛龍篇」（四部叢刊本巻六）に「忽逢二童、顔色鮮好」（忽ち二童に逢う、顔色　鮮好なり）」といい、陸機の「擬青青河畔草」（『文選』巻三〇）にも「粲粲妖容姿、灼灼美顔色」（粲粲として容姿妖やかに、灼灼として　顔色美なり）という。

同時代の白居易の「長恨歌」にも「迴眸一笑生百媚、六宮粉黛無顔色」（眸を迴らして一笑すれば百媚生じ、六宮の粉黛　顔色無し）という有名な句がある。

なお「顔色」の詩語については、埋田重夫氏に「詩語『顔色』の形成とその展開―白居易詩にみられる口語的用法をめぐって―」（『中国文学研究』第八期、八二年）がある。

張籍の「顔色」の用例は他に四例、そのうち二例は「無顔色」と表現しているが、ともに色についていうもので、「かおいろ」ではない。

7・8　竜蟠泥中未有雲、不能生彼升天翼

〔龍蟠泥中未有雲、不能生彼升天翼〕この二句、龍が雲に乗って天に昇るという発想に基づく。これも『周易』乾卦の九五の文言伝に「水流湿、火就燥、雲従竜、風従虎」（水は湿に流れ、火は燥に就き、雲は竜に従い、風は虎に従う）という、古くからある考え方。詩においては、曹植「当牆欲高行」（『楽府詩集』巻六一）に「竜欲升天須浮雲、人之仕進待中人」（竜　天に升らん

と欲すれば　浮雲に須ち、人の仕進するは　中人に待つ）という。仕官のことをいう対句で、「竜」が才能ある人物、「雲」が引き立ててくれる貴顕者として用いられており、張籍のこの詩と同じ方向の例といえよう。

杜甫も「戯寄崔評事表姪蘇五表弟韋大少府諸姪」（『詳註』巻二〇）に「隠豹深愁雨、潜竜故起雲」（隠豹　深く雨を愁う、潜竜　故らに雲を起こす）と用いている。

また、韓愈が「雑説四首」其一（馬其昶校注『韓昌黎文集校注』巻一）で、この竜と雲との関係を取り挙げているのは有名である。

張籍は427「雲童行」（巻七）で「雲童童、白竜之尾垂江中」（雲童童たり、白竜の尾　江中に垂る）と、雲と竜を用いている。ただ、これは気象についていうようである。

【補】

古くから見られる語彙が多用されていて、難解な用語はほとんどなく、内容的にもいわゆる「士の不遇」を詠じたもので、よく見られるパターンということができよう。

ただ、従来の「行路難」の作品と比較すると、張籍のものはやや特異なものとなっている。以前の「行路難」は、鮑照の連作がそうであるように、自己の不遇から人生の有限や無常への感慨に向かうものが多かった。そしてそれらは、しばしば飲酒などの享楽や分相応の生活などによって忘れようとされるものであったようである。そのため、詩に詠ぜられる感情には、起伏や曲折があった。また、女性の閨怨の情を借りて述べるものも多かったようである。

それに対して、張籍の場合は、自己の不遇感のみを平易なことばで集中的に述べ、純粋かつ切実な印象を与えるように思う。特に「君不見」の二句は、「金がなくなって顔色を失った」と、極めて直截に描写する。

清の余成教の『石園詩話』巻二に、張籍の詩を評して、

文昌離婦云、有子未必栄、無子坐生悲。贈孟郊云、苦節居貧賤、所知頼友生。行路難云、君不見床頭黄金尽、壮士無顔色無。寄李司空云、還君明珠双涙垂、何不相逢未嫁時。皆清麗深婉、称情而出。

文昌の離婦に云う、子有るも　未だ必ずしも栄とせず、子無きは　坐ろに悲しみを生ず、と。孟郊に贈るに云う、苦節　貧賤に居り、知る所は友生に頼る、と。行路難に云う、君見ずや　床頭　黄金尽き、壮士　顔色無きを。李司空に寄すに云う、君に明珠を還せば　双涙垂る、何ぞ未だ嫁せざる時に相逢わざりし、と。皆な清麗深婉、情に称いて出づ。

というのも、そのあたりを評価したものであろうか。

『唐文粋』や徐澄宇の選注本にも選ばれ、張修蓉氏『中唐楽府詩研究』においても、張籍の「古題古意」の作品の例としてまずこの詩を挙げるなど、代表的な作品の一つとされているようである。

（橘）

［附記］本稿は「平成十一年度宇部工業高等専門学校学内助成事業」による研究成果の一部である。